
霊夢の幻想事情

澄田 康美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霊夢の幻想事情

【Nコード】

N8389N

【作者名】

澄田 康美

【あらすじ】

あらすじ

今日も平和な幻想郷、しかし、それはあくまで平和なだけでありまして……

（前書き）

前書き

たまには真面目に不真面目に短編小説を書いてみるのもありと判断し、ちよつとやってみました。

あくまで勢いに任せてやっているので、中身があれとか気にしない。見せてあげましょう！！澄田のやる気を！！

ここは幻想郷。根拠は飛び交う魑魅魍魎とか猫耳とか半霊とかふん
どしから察してくれ。

今の所、異変を解決したばかりで平和な日々、博霊の巫女にとって
は望ましい事らしい。

まあ異変は解決しても問題児は残る。そんな問題児達が今日も博霊
神社に集っていく。

今いる面子はお馴染みの萃香と天子である。こいつらは自分の家が
あるのか少し気になる。

とりあえずくつろいでいるだけなようだが、霊夢にとってはそれす
らうつとうしいようだ。

「あのさぁ・・・あんた達は何でそんなにここに来るのよ？」

そんな問いに萃香はこんな答えを返してきた。

「だって、ここなら宴会とかたまにやるじゃん。あたしは割とそれ
目当てなんだよね。」

常日頃酔っている萃香らしい回答だ。

「・・・じゃあ天子、あんたは？」

「私はその・・・構って欲しいって言うかな・・・」

さすがはどM。颯ってくれと言わんばかりにねだってきた。

「あのね、ここはあんたらみたいな暇人の相手をする場所じゃない

のよ。私は一人の方がいいの。だからさっさと帰りなさ・・・」

と言おうとしたが、霊夢の視界に嫌な物に移り言葉を失った。悠然とこつちを飛んでくる魔理沙だ。

「お、今日もまた色んな奴がいるな。ここは賑やかでいいよな霊夢。」

霊夢の心情など察する事なく、無神経な一言を言って霊夢に挨拶した。

「・・・じゃあ、あんたがこいつらどっかに連れて行ってよ。」

明らかに押し付ける気満々だ。

「そうか、でもあたしはこれから紅魔館に行くから、さすがにこいつらがいたらパチュリーが嫌がるぜ。」

言い訳臭がとてする返事。

「あんたねえ・・・」

と言っていると、またもや誰かが飛んできた。今度はアリスだ。見た限りかなり機嫌が悪そうだ。

「あー！！ここにいたのね魔理沙あー！！今度の今度はもう許さないわよ！！！！」

魔理沙に恨みがあるらしく、上海が魔理沙目掛けてビーム的な弾幕を放った。

「ちよま・・・」

霊夢が何かを言う間もなく、飛んできたビームによって土煙が舞った。

その土煙に紛れて、魔理沙が箒で飛び去っていた。とんずらとはまさにこの事である。

「待てえい魔理沙！！」

「あばよく、とつつあゝん。」

どつかで見た事があるようなノリで、二人は神社を後にした。土煙が晴れると、今にも切れそうな霊夢が姿を現した。萃香と天子は割と気にしていない様子。

「魔理沙の奴・・・本当に厄介事しか持ってこないわね！！」

「でも、暇つぶしとかにはいいんじゃない？」

「いいなあ魔理沙・・・あんな風に構ってもらえて・・・」

相変わらずな二人、霊夢はもう限界だろう。

そんな時に、衣玖さんが空からゆっくりと降り立ってきた。もちろん？フイーバーなポーズを取りながら。

視線を釘付けにされている内に、衣玖さんは無事着地した。

ポーズを解き、視線を天子に移した。衣玖さん自体は変に笑顔だ。

「天子様・・・いつまで遊んでいれば気が済むのですか？あなたは仮にも比那名居の名を背負っているのです。これ以上のご無体はお

控えください。」

懇切丁寧な頼みに、天子はやはりただを捏ねた。

「ねえ、私はまだ子供なのよ衣玖？今ぐらい遊ばせてくれても・・・」

と言おうとしたが口をつぐんだ。衣玖さんの笑顔から北斗並のオーラを感じ取ったからだ。

「天子様、帰りましょう？」

「はい・・・」

もうどっちが上司でどっちが部下かわからない有様で、二人は空へと帰っていった。

突然すぎる出来事に、傍観とする霊夢と萃香。

少しして我に帰った二人。お互いの顔を見合わせ、霊夢はすぐに顔をそらした。

「・・・とりあえず、一人帰っていったわね。後はあんなだけ・・・」

「もうそれはいいじゃないか、霊夢。」

霊夢をなだめるように言う萃香。

そんな所に、また誰かが来た。ここでは珍しい顔の勇儀だ。

「やっぱりここにいたね、萃香。」

用があるのは萃香の方みたいだ。

「へ？勇儀？あたしに何の用？」

「ちよつとこれから地霊で鬼が集まるんだ。あんたはどうだと思つてここに来たんだよ。」

「へえ、幻想郷に鬼が集まるだなんて珍しい事だね。よし、いつちょ顔を出しましようか。」

そう言つて霊夢に一瞥した後、勇儀とともに神社を後にした。気がつけば神社には霊夢しかいなかった。

「ふう、やつと歸つていったわね。それじゃ私は・・・」

神社の方に戻ろうとした足が、なぜか止まった。そして誰もいないはずの鳥居の方に振り返った。

誰もいない状態。さつきまで確かに霊夢はこの状態を望んでいた。だがいざ来るとなるとどうやら名残惜しくなるようだ。

昔は誰一人としてここまで来る者はいなかった。参拝に来る者すらも。仮にも人以上の力を持った霊夢は、人々から見ればただ恐ろしい物に見えていたのだろう。

仕方がないのだ。博霊の名を背負った時点で、霊夢はもう人とは違う者になっているのだから。

皮肉にも面倒で嫌っていた博霊の巫女としての異変解決が、霊夢に色々なつながりを作っていたのだ。

いない事の寂しさを少し噛み締めて、霊夢は神社の方に座り込んだ。ただばーつとしていると、紫が隙間からにゅつと姿を見せた。

「あら、珍しいわね、ここにあなた以外の者が誰もいないだなんて。

「からかっているのかよくわからない調子だ。」

「紫……」

割と気を落とした様子で、返事をした。

「霊夢、わかったでしょう？ いる事といない事の差がね。」

霊夢の心を見透かしたような一言を飛ばす。

「な、何の話よ？」

明らかな動揺は、その答えを隠しきれずにいた。

「ふふふ、あなた、変わったわよねえ、いいえ、あなただけじゃないわね。あなたと関わった者は全て変わっていったわねえ。恐らくは私も含めて。でも変わっていく事はいい事だと私は思うわ。変わらない良さもあるでしょうけど、変わっていく事は自然の姿、あるべき姿なのよ。」

「何が言いたいのよ……紫。」

「……一人がいいだなんて事は、思わない方がいいわよ、霊夢。」

「……そうね。」

霊夢の顔から、悩みや寂しさといった物は消えていた。憑き物が落ちたような感じである。

そんな様子の霊夢に、紫がこんな提案をしてきた。

「じゃあ、今日は宴会なんてどうかしら？」

「宴会？」

霊夢は少し考えた。そして答えを出した。

「・・・じゃあ、あんたも呼びかけに協力してよね。」

「あ、それなら大丈夫。多分そう言うと思ったからもうやってるわ。」

と言った矢先に、文が颯爽とこちらに飛んできた。

「聞きましたよ霊夢さん！今日は類を見ない大宴会をするそうですね！？この私も是非参加させてもらいますよ！！」

ピシッと霊夢に敬礼をした。

軽く驚いた後、霊夢は紫に問いただした。

「ちょっと紫、いくら何でも手回し早すぎるでしょ？」

「いいじゃない。こうなる事は予想ずみって言うか・・・」

と言っていると、今度はレミリアが咲夜に日傘を差して貰いながら歩いてきた。恐らく文と同じ口であろう。

「霊夢、今日の宴会だけど、私も参加させてもらっわね。」

「ええ？あんたも？」

「いいじゃない霊夢、これも運命なんだから。」

その言葉から、霊夢は紫のやった手回しの良さの要因を全て理解した。

「紫・・・こうなるとわかっててやったのね。」

「はて、何の事かしらねえ。」

とぼける紫に、霊夢は突っかかる事もなく察した。

「まあいいわ、これから宴会の用意をしなきゃね。来た奴、今からちよつと手伝ってよ。」

そう言つて、霊夢は来た者と共に倉庫に行つて用意に取り掛かつていった。

「ふふ、それがあなたのあるべき姿よ。博霊の巫女としてのね。」

締めくくる感じの一言を言う紫であつた。

「あら、あなたは参加しないの？」

誰もいない所に、紫はなぜか誰かを呼びかけようと・・・

「とぼけても駄目よ、最初からいた以上は、あなたも参加しなさいよ。」

・・・これはどうやら、このナレーションに向かって言ってるのか？

「そうよ。」

おいおい、さすがは隙間妖怪だ。

「で、あなたは参加しないの？」

そうだなあ・・・あくまでナレーションである以上、参加するにしてもこんな形のままだが？

「それでいいのよ。どうせ作者は宴会まで書く気ないみたいだから。」

ははは、それは一本取られたな。いや、ナレーションにそんな事関係ないか。じゃあ、遠慮なく参加させてもらうよ。

「それじゃ、早速手伝いしてきたら？」

ああ、そうする。

こうして、ナレーションがなぜか宴会に参加する事になったとさ。どっとはらい。

（後書き）

後書き

こ・・・これはひどいですね・・・ひどすぎますね・・・

いるかもわかりませんけど、ファンの人本当すみません。

宴会はいつそ書こうかと悩んだ末、結局割愛させていただきました。本当すみません。

まあ、これはやりたかったただけですので、連載の方はいつものようにしっかりやっています。あ、あつちはあつちでやりたかっただけでもありますか・・・やっぱりすみません。

ま、ここは一つ、「ははは、こやつめ」程度の心持とか、「またやったのか、仕方の無い奴だ」って思ってくれていれば、それが一番ありがたいのです。

所詮駄文の塊ですので、見てくれた人は本当感謝しています。

これを見た人は、もっとマシな短編もありますので、そっちの方を見る事もお勧めします。

スペシャルサンクス

博霊 霊夢 様

伊吹 萃香 様

比那名居 天使 様

霧雨 魔理沙 様

アリス・マーガトロイド 様

永江 衣玖 様

星熊 勇儀 様

八雲 紫 様

射命丸 文 様

レミリア・スカーレット 様

十六夜 咲夜 様

ナレーション 様

バクテリア 様

では、このような粗末な物をお読みいただき、真にありがとうございました。

b y 澄田 康美

P S、短編は楽しいから好きです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8389n/>

霊夢の幻想事情

2010年10月11日10時58分発行